三重・安養寺跡

1 所在地　三重県度会郡二見町字溝口
2 調査期間　一九九二年(平4)五月～一二月
3 発掘機関　二見町文化財調査会
4 調査担当者　大西素行（二見町教育委員会）
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　一一世紀後半～一二世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

安養寺跡は、五十鈴川が下流域で五十鈴川派川と分流する地点に広がる低丘陵地の谷間の湿地帯に位置している。この地に住宅・リゾート開発が及ぶことになり、一九九一年度の第一次試掘調査の結果を得て二三〇〇㎡にわたる調査を実施した。

（答志・鳥羽）

安養寺は、平安時代末期に西行が、晩年の一時期に草庵を結んだとされる所である。調査の結果、二層の整地層上・下面で遺構や遺物を検出した。平安時代末期～鎌倉時代前半の遺構では、礎石建物二棟・掘立柱建物一棟と、これらの建物に付随していたと思われる区画排水溝三条・池状遺構二箇所を検出した。また、鎌倉時代後半の遺構として、掘立柱建物一棟と、区画排水溝四条・瓦溜一基を検出した。

遺物は、土器、瓦、木製品などが多量に出土したが、特に木製品が多いことや、墨書土器・墨書木製品（三〇点）が多いことが注目される。これらは、整地層の上や下で全面にわたり出土したが、特に旧整地層に伴う遺構内や、整地層下面で採集した平安時代末～鎌倉時代前半のものが多い。

木製品では、へら（多量）、刀子や筆、鋸の柄・楔等の工具、下駄（連歯・差歯など二〇点）・板草履・檜扇等の服飾具、刀形・矢形・鳥形等の祭祀具、毬・毬杖・将棋の駒等の遊具、箸（多量）・杓子形木製品・鍋蓋・俎・折敷等の食事具、曲物の底板・漆椀・栓等の容器、燈台や供物に使われたと思われる台状木製品、部材等が多量に出土した。木簡は八点出土したが、習書や断片が多い。

木簡や墨書木製品は、一四m×二〇m、深さ八〇cmの池状遺構から出土したものが多い。この遺構は、北から南へ二回ほど縮小するように埋め立てられていた。木簡の他に、人物と蛙・風景を描いたもの、絵馬らしき方形板も伴出している。多量の土器や木製品と共に銅椀の鋳型や鞴の羽口、切り出した松等の自然木も捨てられてい

た。伴出した土師器や陶器等から、これらの年代は平安時代末～鎌倉時代初期のものと推定される。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・「諸　諸仏□[也カ]『五年五月□』」
　『□』
・「□見眼　」　190×27×5　065

(2)
・「〈□謨両部教主大日如来□王如来
　无量□」
・「〈　宗歳月　□　月　」　272×34×6　033

（大西素行）

正倉院の薬壺と検封木簡

本年の正倉院展に、薬物の冶葛を容れた壺が出陳されていた。興味深かったのは、その蓋の墨書である。蓋は一部欠損しているが、「冶葛」と墨書があり、これは従来から紹介されている。問題はこれまで言及のない、あと二箇所の墨付きである。展示図録の写真からもわかるように、この内の一つは明らかに文字の一部で、残画から判断すると、「封」の字と思われる。貼紙した上に、紙からはみ出す形で文字が書かれていたらしい。「冶葛」の字の右下にある、もう一つの墨書も、やはり同様な「封」のようである。もとは蓋から壺の本体にかけて紙を貼り、その両端に「封」字を書いて封印することが行われていたのであろう。これらは薬の検量や出用が実際的意味をもっていた古代のものではなかろうか。

その年代はともかく、これらの封は、近年例を増しつつある、いわゆる検封木簡を考える上に注目される。検封木簡は、上下両端に切込みを入れて紐で縛り、各々に「封」などの字を書く例が多いが、紙では弱い場合や汚損を避ける時に木簡が使われたのであろう。しかも単なる封印なら、封泥のように一箇所でもよいと思われるが封の場所が二箇所に及ぶのは、薬壺の蓋と身のように、二つに分離する構造のものがあり、それを封じたものとみられはしないであろうか。検封木簡について、更に多方面からの検討が望まれる。

（東野）